

社会を変え始める女性たち

— *Uncle Tom's Cabin* における理想の女性像

宮 崎 美 佳

I

Harriet Beecher Stowe (1811-96) が執筆した *Uncle Tom's Cabin* (1852) は、当時爆発的な人気を誇った。たくさんのファンレターが届くなど読者からの反響も大きく、当時としては珍しく重版もされたが、またすぐに完売するほどであった。Sentimental novels の手法を使用し、女性に受け入れられやすく書かれているこの作品には、当時の様々な社会問題が提示されている。20世紀以降の批評において、この作品は主に人種、女性性そしてキリスト教的な奉仕の精神という三つの観点から評価されることが多い。

この作品が出版された当時の書評によると、まず、Stowe が女性の作家であるという点に注目している *The Morning Post* の書評がある。この書評は、*Uncle Tom's Cabin* における Stowe の奴隷制への視点が、男性と女性の両方の視点からしっかり捉えられているとして、彼女を男性的な才能を持つ作者だと称賛している。また、この作品で扱われている奴隷制について述べられている主な書評には、*The Liberator* と *Southern Literary Messenger* の二紙が挙げられる。奴隷制廃止論者の William Lloyd Garrison (1805-79) が編集した *The Liberator* は、Stowe がこの作品の中で描いている奴隷制の長所と短所が、彼女の持つ豊かな知識と素晴らしい洞察力によって書かれていることを高く評価した。この批評とは対極的に、奴隷制を支持する *Southern Literary Messenger* は、書評の全体に渡って *Uncle Tom's Cabin* を “fiction” と称し、この作品で描かれているすべての描写は、奴隷制の真実を伝えるために作られたものなどではなく、奴隷制を擁護する者たちを中傷する目的で作られた Stowe の虚言だと強く批判した。

James Baldwinの“Everybody’s Protest Novel”(1949)は、おそらく現代Stowe批評の中で最も有名なものだ。BaldwinはStoweを人種差別主義者のステレオタイプと指摘した。それを引き継ぐ形でArthur Rissの批評がある。Rissは、Stoweが奴隷を本質的にキリスト教徒に向いているように描くことで、黒人に対し生物学的な人種差別を行ったとしている。Rissによると、Stoweは、アフリカ系の人種を純朴で物事を素直に受け入れるというステレオタイプの存在として描き、黒人こそがキリスト教の道徳的な信者となることのできる貴重な人種であるとして、読者に奴隷制廃止を訴えたと指摘している。また、Peter Stoneleyは、Stoweに限らず白人の作家は黒人が従順で動物的な素直さを持っていると同時に、野生的なまでの性的魅力を持っているように描く点を指摘した上で、Stoweの作品の魅力は、黒人の身体的な性的魅力と、従順に守っていたキリスト教への服従をも一瞬にして破るような、野性的本能にあるとしている。

Jane Tompkinsの批評は、*Uncle Tom’s Cabin* 批評の中でもひとつの境界となっている。彼女の批評によって、この小説に関する批評の見解が一変する。今までこの小説に登場する人種の描写にばかり向いていた批評の目を、Tompkinsは、家庭の描写そのものに向けさせた。そして、センチメンタルと評されるこの小説の中にある政治的かつ社会的な重要性を主張し、不当にも一般的に軽視されてきた、女性特有のセンチメンタルな感情にこそ世界を変える力があることを示した。Gillian BrownはTompkinsのこの考え方を引き継ぎ、新たな見解を示している。フェミニストである彼女たちの批評は、この小説の中にあるセンチメンタルな部分が読者層の女性の感情にはたらきかけた結果、社会をも変えていく力を持っているということに注目しており、言うなれば家庭内の力と政治の力が結びついていることを論証した点で斬新さがある。Brownは*Uncle Tom’s Cabin* がステレオタイプの南部奴隷社会を重んじる家庭の批評であると同時に、奴隷制と男性社会すなわちmarketplaceへの抵抗だとした。また、BrownはCatherine Beecher(1800-78)が白人女性の守るべき場所として挙げているkitchenに奴隷がいることで白人女性が本来持ち得る能力を崩壊させることも指摘し、Stowe

が家庭そのものの価値を上げていくことでどのようにアメリカの社会を変えていきたかったのかを示している。

Amy Schragger LangやJean Fagan Yellinらは、Stoweの文学を宗教的な見解から見た批評を展開する。Langは、Stoweが描くキリスト教としての伝統的な美德の重要性と、受動的な人種および消極的なジェンダーの概念が結びつくことを指摘し、Stoweによって、女性と奴隷が理想的なキリスト教徒として描かれていることを主張した。そしてYellinは、Stoweが*Uncle Tom's Cabin*をキリスト教徒と非キリスト教徒の二項対立で描いていることを指摘した。すなわち、この作品のキリスト教徒は、静的で支配される側の存在である白人女性と奴隷である一方、非キリスト教徒の大半が、動的で支配する側の存在として位置づけられる白人男性だということだ。Yellinは、Stoweがこのような二項対立のもとに、キリスト教と女性が存在すべき社会的立場の重要性を、この作品に登場する女性の中に投影しているとした。これらすべての批評が、*Uncle Tom's Cabin*の21世紀の読者に対し、この作品を、南北戦争 (the Civil War, 1861-65) を引き起こすきっかけとなった、単なる奴隷制の悲劇を訴えたSentimental novelsという言葉だけでは片付けられないことを表している。

この論文は、Stoweが*Uncle Tom's Cabin*の中で登場させるMrs. Shelby、Mrs. Bird、Marie、Ophelia、そしてRachelの5人の白人女性に注目し、Stoweがこの作品の中で、読者層である白人女性たちに対しどのような女性像を理想として掲げ、そしてどのようにkitchenを守る自分たち女性が、男性社会であるmarketplaceに進出していくようはたらきかけているのかを論じていくものである。

II

TomはShelby家に幼少の頃から仕えていた奴隷だが、主のMr. Shelbyが事業に失敗してしまったことにより、その借金返済に充てる財産として売却されることになる。19世紀当時のアメリカにおいて奴隷は財産であり、

借金返済に奴隷を売買することは一般的なことであった。そのため、Mr. ShelbyもTomと混血の奴隷の子Harryを売却することを決断する。だが、その妻Mrs. Shelbyは、簡単に奴隷を売買しようとする夫の行為そのものに異を唱えるのだ。19世紀女性の理想像とも言うべき道徳観と信仰心を与えられた人物として描かれている彼女は、夫が道徳的、人道的に誤ったことをしようとしていることを指摘し、人身売買以外の方法で借金を返済する方法を導き出すことを提案する。(30)

いうまでもなく、Mrs. ShelbyにとってTomとHarryは彼女の家庭の中でとても大切な役割を担っている奴隷である。TomやHarryに限らず、Shelby家では奴隷を売却することなど今まで一切考えていない。Shelby夫妻は、奴隷をただ家事に使役させるだけでなく、信仰心も与えることで、彼らの心の中を豊かにさせる努力をしてきたのである。つまり、奴隷たちを売却するなどという非人道的なことは、Mrs. Shelbyの念頭にはなかった。だからこそ、夫の借金を返済するために、彼女は奴隷ではなく、自分の持っている高価な時計を売却するという方法を提案したのである。このような毅然とした態度をMrs. Shelbyに行わせることで、StoweはMrs. Shelbyを理想の女性像として描こうとしている。

Mrs. Shelby was a woman of a high class, both intellectually and morally. To that natural magnanimity and generosity of mind which one often marks as characteristic of the women of Kentucky, she added high moral and religious sensibility and principle, carried out with great energy and ability into practical results. (9)

この描写により、Stoweは読者層を無意識のうちにMrs. Shelbyのような女性を理想として考えるように促している。Mrs. Shelbyは常に優しく、優雅で賢く、そして理知的な女性として性格づけられ、いつでも自分の夫に気高く生きて欲しいと願う慎ましさも兼ね備えていた。なぜなら、彼女は男性と女性の社会的立場を知っていたからだ。男性は経済的、社交的な場で

ある marketplace に生き、女性は家庭的、道徳的な場所である kitchen に生きている。これらの社会的役割の差が女性を marketplace から引き離しており、その例に漏れず、Mrs. Shelby も 19 世紀のアメリカ人女性宜しく、彼女の社会的立場である kitchen に基盤を置いていた。

だが、Mrs. Shelby は社会的立場を脱し、自分の道徳的観点から夫の考えに異を唱えることになる。これは、彼女が男性の財産である奴隷を利用し、女性が守るべきとされている家庭をしっかりと守ることで、女性が kitchen から男性の社会的立場である marketplace に向かって一歩前進したことになる。ただし、ここで重要なのは、Mrs. Shelby が夫の事業の失敗を咎めているのではないということだ。彼女はただ、夫の借金の返済を心から心配している。また、彼女は自分の社会的立場を意図的に変えようと思立っているわけでもない。彼女はただ奴隷売買という行為そのものを忌み嫌っているのだ。それは彼女の “O, Mr. Shelby, I have tried — tried most faithfully, as a Christian woman should — to do my duty to these poor, simple, dependent creatures.” (28) という言葉からも明確である。この言葉こそ、Mrs. Shelby の献身的で慎ましやかな性格を言い表す格好の言葉である。この言葉によって、Mrs. Shelby が女性の守るべき kitchen そして家庭という場所を、自らの道徳心と母性で守っているということを示している。奴隷売買が残酷であると知りつつも、彼女がまるで悲劇の主人公であるかのように夫にすがりついて奴隷売買を止めるよう嘆願するなどという行為を行わないのは、彼女の理性によるものだ。彼女はあくまでも、信仰心と道徳心を胸に、自らが正しいと思ったことを行うだけなのである。だからこそ、夫が奴隷売買を行うという決断を変えないと理解したとき、彼女は夫に恥をかかせることも、まして自分の身を危険にさらすこともなく、混血女性の Eliza を逃亡させる。

Eliza は売られようとしている息子 Harry を守るために Shelby 家から逃亡することを望んだ。Mrs. Shelby は女性の守るべき場所である家庭の秩序を乱さぬよう実に巧みな方法で、奴隷商人 Haley を足止めする。それは、夫の財産のひとつである、奴隷を使うという方法である。家庭を守る立場に

あるMrs. Shelbyは、当然のことながら家庭内のことを熟知している。言い換えれば、彼女は夫の財産とも言うべき奴隷たちについても熟知しているということになり、彼女が奴隷たちそれぞれの性格まできちんと把握していることを意味している。つまり、奴隷たちにどのようなにはたらきかければElizaがShelby家を出るまでの時間稼ぎをできるのかを完全に解っているということだ。そして、奴隷たちもMrs. Shelbyが自分たちの性格を理解していることを解っているため、お互いの間である種の信頼関係が生まれている。だから、彼女には奴隷たちに簡単な言葉をかけるだけで自分の真意を理解してもらえような関係が成立しているのだ。(46-47) Mrs. ShelbyはわざわざHaleyの耳に届く距離でChloeに夕食を早く作るよう命じる。もちろん、この命令は表向きのもので、真意は違うところにある。Shelby家の奴隷たちは女主人が自分たちに何を求めているか理解できているので、夕食を早く作れという命令が表向きのものであると判断している。彼らは、女主人の命令の真意がElizaとHarryをHaleyの魔手から逃がす時間稼ぎをすることにあると理解し、食事の準備において、Mrs. Shelbyと奴隷たちの間に暗黙の了解が成立するのである。kitchenで調理を仕切っているChloeや他の奴隷たちは、わざとソース作りに失敗する。その状況を急かされたChloeは“warn't a going to have raw gravy on the table”(47) と言い放ち、もっと丁寧に夕食の準備を行わせる。そうすることで、彼らの主人と女主人が喜ぶのが解っているからだ。それは、Shelby夫婦のHaleyに対する態度からも読み取れる。19世紀アメリカの奴隷所有層である中流階級らしく、この夫婦は非道な奴隷商人に対し、奴隷売却を止めさせるために泣き喚くようなことはしない。だからといってMr. Shelbyが奴隷商人という身分を尊重しているわけではなく、むしろ人身売買で生計を立てるような人間を忌み嫌っている。(49) しかし、TomとHarryの売却を止めるよう積極的にはたらきかけることはなく、ただHaleyの傲慢な態度を黙って見ている。感情のままに行動するのは当時の彼らの美德に反する。なぜなら、marketplaceに出ている男性は、女性のように情に流されることなく、いつも冷静に物事を判断していかねばならない役割だからだ。夫が冷静に行動しなければ

ならない社会的立場であることを理解しているMrs. Shelbyは、家庭を守る社会的役割を与えられた女性の基盤とも言うべきkitchenの機能と、家庭の中にある夫の財産である奴隷の能力を最大限に利用し、ElizaとHarryが逃げられる環境を作り出すことに尽力する。奴隷たちは、このような状況下では、主人に従うよりも女主人に従った方がいいということを理解している。なぜなら、今回のTomとHarryが売却される件は、家庭の中で起こった事件だからである。家庭内のことは、家庭を守る社会的身分を与えられている女性の指示を仰ぐ方がより正しい方向へ導かれるということを奴隷たちも理解している。また、それを夫のMr. Shelbyも理解しているからこそ、夫婦の間に強い信頼関係が生まれている。Mr. Shelbyは妻の道徳的な考え方を尊重するだけでなく、妻の尽力によって自分の家庭内にいるすべての者たちが平和に暮らせると信じている。(9) したがって、Mrs. Shelbyは奴隷と道徳心という女性を持つ最も有力な手段を活用することによって、調和のとれた家庭を保っていくことができるのだ。そして、道徳心と奴隷をうまく活用して家庭を守り、男性を正しい方向へ導いていくことこそ、女性が社会を生き抜く上で最も有力な手段であり、Stoweの挙げる最も理想的な女性の生き方であることを提示している。つまり、夫の社会的立場を一切不利にすることなく、Elizaを逃亡させることに成功したMrs. Shelbyは、Stoweにとって最も理想的な女性像を持つ白人女性として描かれているのである。

III

Tomがケンタッキー州のShelby家から売却された先は、ニューオーリンズのSt. Clare家だった。St. Clare家は南部の裕福な奴隷所有者層として描かれ、ここには主のSt. Clare、妻のMarie、そしてこの物語で最もセンチメンタルな部分を担っている娘のEvaが住んでいる。Stoweがこの作品を発表した後、彼女がこの一家を通して南部の奴隷所有者層の生活を映し出していることに関しては、かなりの数の批評が存在する。Eric J. Sundquistの批評

によれば、Stoweは南部に赴いたことも、ましてや南部の奴隷制についても理解できておらず、彼女がこの物語で描いている南部の姿にはかなりの誤りがあるとされている。だが、どんなに南部の生活像に誤りがあったとしても、Stoweがこの作品で19世紀の理想の女性像についての見解を著していることは否めず、その点に関して評価をしないわけにはいかない。また、Stoweが描いた誤りだらけの南部像は決して彼女の頭の中だけで作り上げられたものなどではなく、彼女が生きていた時代に、このような南部の奴隷所有者層への偏見がたしかに存在していたということだ。言い換えれば、誤りだらけの南部像が投影されているSt. Clare家こそ、南部の奴隷所有者層のステレオタイプと言わざるを得ないのである。

この誤りだらけと評価されている南部のSt. Clare家に、南部への偏見を抱いているステレオタイプの北部女性が同居することになる。St. Clareの従姉妹のOpheliaだ。St. Clare家が南部のステレオタイプとして描かれているのに対し、Opheliaは北部のステレオタイプとして描かれている。Opheliaはニューイングランドに45年もの間、まさに“no servants”(135)の状態で生活していた。また、彼女はとても敬虔なキリスト教徒で、規律正しく、さらに責任感のある女性だった。そんな彼女が生まれ育ったニューイングランドの家庭の、kitchenに関する興味深い描写がある。この家庭のkitchenでは、床や調理器具が汚れることも、散らかることも、まして家具の一切が物音を立てることなく、すべての家事が執り行われているのである。(135-36) 彼女は、一切の無駄がない、規律正しい家庭の中で生きてきたのである。それゆえ、彼女は持ち前の責任感から、単なる道楽などではなく、従兄弟であるSt. Clareの家庭の秩序を守るという大義名分を立ててSt. Clare家へやってくるのである。

厳密にはOpheliaとStoweの生い立ちは異なっているものの、OpheliaもStoweと同じく敬虔なキリスト教徒の家庭に育っている。この点では、Opheliaは作者Stoweの姿が投影された存在となっていると考えられるが、二者の間には根本的な違いがある。それは、Opheliaが結婚をしたことがない、すなわち父の手から離れて生活をしたことがないという点だ。彼女

は家父長制の中で、娘という役割だけを45年間与えられてきてしまっているのである。その結果、不運にも未婚のOpheliaには家庭を支える女性の礎とも言うべき母性はおろか女性性も欠落していることになる。それを暗示するかのように、彼女は45歳でありながら、ニューイングランドの家庭で“child” (135) という立場を与えられていたのである。また、彼女はMrs. ShelbyやStoweと同じように信仰に篤い女性であるが、理想的な女性としての生活を送ることができない。理想的な女性像とは言えないOpheliaがSt. Clare家の混沌を改善すべく奮闘する様子を描く中で、Stoweは理想の女性像の定義を再び始める。StoweはSt. Clare家に不協和音が生じている様子を描き、読者に南部の家庭は崩壊しているかのように見せるが、南部にも、北部と同様に、統率力があり、奴隷たちの個性を尊重してきちんと教育できるような素晴らしい女性がいることを示す。素晴らしい南部女性たちは奴隷に鞭を使ったりせず、各奴隷の特長を活かすことで自分の家庭内の調和を保ち、秩序を守ることができるのだ。(178-79) そして、StoweはMrs. Shelbyを引き合いに出して“Such a housekeeper was Mrs. Shelby, whom we have already described; and such our readers may remember to have met with.” (179) という評価を与え、まさに理想の女性であることを再び読者に印象づける。ここから導き出せるのは、StoweはOpheliaがどんなにSt. Clare家で女主人として立派に振る舞ったとしても、Mrs. Shelbyよりは理想的な女性ではないと定義しているということだ。それを如実に現しているのが、OpheliaがSt. Clare家で女主人として立派に振る舞おうと決意をした第一日目の朝、料理長としてkitchenを取り仕切る奴隷Dinahとの意思の疎通を図るのに大変苦労してしまうという描写である。

Opheliaは、散らかり放題で文字どおりめちゃくちゃになっているkitchenの秩序を正そうとするが、Dinahと押し問答になってしまう。St. Clare家では、本来女主人として家庭を守らなければならない立場にあるはずのMarieがすべての家事を放棄しており、今まで一度もkitchenに立ったことがない。そのため、奴隷であるDinahが女主人の代わりにkitchenの仕事を指揮する立場になっている。しかし、欠けたティーカップの中や食器棚のあちこち

にナツメグがしまわれていたり、テーブルクロスで生肉が包まれていたり、Dinahの髪油が食器に入れられていたりというように、kitchenにあるすべてのものが本来の使用法とは程遠い使われ方しかされておらず、まさに秩序が乱れた状況にある。(181-82) つまり、女主人が指揮を執ることのないSt. Clare家のkitchenは、完全に混沌としているのだ。この混沌はkitchenにとどまらない。Marieは育児も放棄しており、女主人がkitchenでの仕事も育児も放棄しているSt. Clare家の家庭内は、崩壊の一途を辿っているのである。そのために、OpheliaがMarieに代わってSt. Clare家の女主人になるべく奮闘するのであるが、彼女も女性性が欠けているためにうまくいかない。彼女に欠けているものを知っているのか、奴隷たちは、家庭内の混沌を正そうとするOpheliaが自分たちの怠惰な部分を探し出すたびに警戒し、不平を言うなど、彼女を根本的に敵視している。(179) St. Clare家の家庭内をよりよくするために奴隷たちの規律を正したいOpheliaであるが、奴隷たちは彼女の声に耳を傾けようとしない。なぜなら彼らは、今まで自分たちが怠惰であるという点で主人たちに咎められることは一度もなかったもので、突然現れた新しい女主人の厳しい忠告になど従いたくないのだ。その結果、いくら注意しても言うことを聞かない奴隷に辟易したOpheliaはkitchenをひとり片付けるという最終手段に出るのだが、奴隷たち、特にDinahが烈火のごとく怒り、反発する。(179) Dinahは従順な奴隷ではなく“erratic”(179)な奴隷だ。その点でも、DinahはShelby家のkitchenを任されていたChloeとは違う。Stoweは、女主人の指示が一切ない状態で奴隷の仕切るkitchenがいかに混沌としているかということをOpheliaとDinahの押し問答の描写を巧みに使い、家庭を守る役割を与えられている女主人すなわち白人女性が自らの役割を放棄すると、その家の奴隷までもが墮落することを警告している。Shelby家のChloeはMrs. Shelbyによってしっかりと躡られているが、Dinahはその正反対で、Marieによって本当の意味では躡られていない。それゆえ、独学による天才で、自信過剰で意固地で偏屈な奴隷になってしまったのだ。(179) Brownは、Dinahの混沌としたkitchenの描写を“signifies the immanence of the dissolution of domesticity’s difference from the marketplace”

(Brown 16) と指摘している。この作品はそれゆえに、家庭を守るという白人女性の根本的な社会的役割が文字どおり崩壊し、女性社会が男性社会のようにきちんと機能しきれていないことへの警鐘を鳴らしているとも解釈され得る。だから、St. Clare家の女性であるMarieとOpheliaは家庭を守り続けることができない。主であるSt. Clareが不慮の事故で帰らぬ人になった後、Marieは家庭を守ることが完全にできなくなり、未亡人として自分の故郷に帰っていく。一方、OpheliaはEvaの死を経てStoweの道徳観と宗教心を与えられ、St. Clare家で最も厄介者扱いされていた奴隷の少女Topsyを立派に成人させる。彼女は、未婚でありながらも最終的に母性を手に入れ、女性性を取り戻したのだ。こうしてStoweは、OpheliaをMrs. Shelbyに次ぐ理想的な女性に作り上げた。

だが、Opheliaが最終的に母性を与えられたからといって、Stoweが描く理想の女性像は、St. Clare家の中に反映されているとは言い難い。独身を貫き、家父長制の中に身を置き続けるOpheliaと同様に、Evaの母親であるMarieもStoweにとっての理想とは言えなかったからだ。Stoweはもっと道徳的で理知的、そして女性としての確固たる信念を持った人物を理想の女性像として挙げようとしていた。だが、この作品の登場人物の中で最もセンチメンタルな部分の象徴として描かれているEvaの母Marieには、一切母性というものが存在しない。Stoweは彼女に典型的南部女性の姿を映し出し、Mrs. Shelbyとの決定的な違いを浮き彫りにした。MarieとMrs. Shelbyは共に南部の奴隷所有者の妻だが、Marieはあまりにも怠惰であるという、Mrs. Shelbyとかけ離れた性質を与えられている。StoweはMrs. Shelbyが南部の中でも本当に優れ、非の打ち所のない女性であることを幾度となく主張するが、Marieについては“Such a housekeeper Marie St. Clare was not, nor her mother before her. Indolent and childish, unsystematic and improvident, it was not to be expected that servants trained under her care should not be so likewise;” (179) としか表現せず、彼女を称賛することは一度もない。

Mrs. Shelbyとは違い、Marieは深南部 (Deep South) の奴隷制の中で生まれ育った。容姿端麗だったため、結婚前は様々な男性と文字どおり華やか

な生活を送っていた。そのため、彼女は奴隷だけではなく、様々な男性に囲まれており、例えば家事など、自分が誰かのために奉仕するということを考えない生活に慣れすぎていた。彼女はSt. Clareと結婚しても、女性の社会的立場である家庭を守るという任務を遂行する必要性がなかった。掃除も洗濯も料理もそして子育てもすべて奴隷がするので、彼女には家庭を守るために動くという意味さえ与えられなかった。尤も、彼女が家庭を守るという女性の立場を放棄するのは、自分と対をなす社会的立場の夫St. Clareとの間に、愛はおろか信頼関係が結婚初期から一切存在していなかったことにも起因する。彼女は男性を“men are constitutionally selfish and inconsiderate to woman” (150) と考え、わがままで、女性（自分）に対し思いやりのない存在だと考えてしまっていた。このようなMarieであるが、娘のEvaは彼女のことを心から愛していた。しかし、MarieはEvaが自分に甘えてくることを煩わしく思っている。(142) 娘に愛撫することさえ煩わしくなっている彼女は、母性をも失ってしまっているのだ。彼女の生い立ち、夫との確執、娘と自分の抱く愛情の差が複雑に交錯し、Marieはこの物語の中で最も厄介な人物となっている。

Opheliaは、女性として社会的に与えられた役割を放棄しているMarieに対し、彼女が怠惰な生活を続けているとやがてSt. Clare家が崩壊すると警告するが、Marieはそれを聞き入れることはない。Marieは、家事や育児を放棄している自分を咎められることを筆頭に、自分にとって受け入れ難い状況に直面するとvinaigretteを取り出し、その中の薬を嗅ぐことで落ち着きを取り戻す。彼女は常にvinaigretteを携帯し、頭痛やだるさで身体を動かすのが億劫であるかのように病み続ける女性なのだ。彼女は、自分が生まれ育った過程で築いてきた奴隷との関係はもとより、女性は家事よりも美しく着飾ることにこそ存在意義があると頑なに信じてきた。つまり、自らが抱き続けてきた価値観の正当性を脅かされたときに彼女が取り出すvinaigretteは、言い換えれば家父長制を正当化する意思を覚醒する薬を持ち歩くための、大事な容器なのである。奴隷にすべての家事を任せ、自分は家庭内で着飾って指一本動かすことのない生活は、まさにMarieが幼い頃か

ら育ってきた環境そのものである。しかし、夫のSt. Clareはそんな彼女を肯定しない。彼にとって既にMarieは、妻でありながら、娘のEvaよりも手のかかる娘のような存在になってしまっている。それを象徴するかのように、St. Clareは自分の娘に、誰よりも敬虔で、信仰心のままに生きた自分の母親の名前であるEvaという名を与えて溺愛している。(134) そして、彼の願いどおり、娘は母親のMarieよりも篤い信仰心と真摯な態度で奴隷と平等に付き合おうとする、素晴らしい少女に成長する。こうして、夫の愛情は、手のかかる妻Marieから離れていく一方なのである。さらに、Marieは、ニューイングランドから来た夫の従姉妹のOpheliaによって、家庭を守るという任務に従事していないことを説教されてしまう。だからこそ、彼女の体調不良の原因は、この家庭内にいるすべての人物との価値観の相違であり、vinaigretteは家父長制を信じる自分を正当化するためのお守りという役割を担っているのである。

そんなMarieが病んでいるのを逆説的に象徴するためにしばしば登場するvinaigretteだが、Marieはこれと同様のものをEvaに持たせている。しかし、Evaはvinaigretteを持ち歩きこそするが、Marieとは違い、その中の薬を使うようなことはない。そればかりか、Evaはこのvinaigretteを自分には必要のないもののだとして、具合の悪そうな奴隷のMammyに渡そうとしてしまう。(156) それを目撃したMarieはEvaをひどく叱責するが、Marieにとって自分の持つ価値観を正当化させるために機能している金やダイヤモンドの装飾を施された、いわば支配者の象徴とも言うべきvinaigretteをEvaが受け入れないということは、すなわちSt. Clare家において南部的家父長制の継承がなされないことを意味する。また、Evaからvinaigretteを渡されたMammyは、それを自分たち奴隷が持つには畏れ多いとして、受け取ることを拒む。なぜなら、彼らは奴隷であるがゆえに、白人のように個々の家庭を築くことさえ許されないため、家父長制を尊重するという観念を存在させることはあり得ない。そのため、奴隷にとってもMarieのvinaigretteが不要のものとなるのである。つまり、Marieが頑なに信じている南部的家父長制は、vinaigretteという姿を借りて、St. Clare家ではもう機能せず、継承

されていかないものとなっていることが如実に現れているのである。それにも気付かず、Marieは自分が頑なに信じている南部の家父長制を否定されそうになるたびに、無意識のうちに大げさなほど、病んでいる自分をまわりに見せていた。だが、自分の体調不良を誇張することに必死な彼女は、Evaの体調が悪いことに関しては、頗る無頓着なのである。なぜなら、Evaの病は家父長制への回帰を求めるために無意識に患うような病ではなかったからだ。自分と同種の病気ではないと判断されてしまったEvaは、Marieにとっては疎ましい存在になってしまっている。だからこそ、Evaが死に瀕しているときも、Marieは自分の娘が死ぬという事実を信じることができない、最も愚かな母親になってしまうのである。

Marieは愚かにも自分が世界で一番悲劇の女性だと思い込んでいる。自分の母性の欠如が原因で娘を死に至らしめたとは考えることなどなかった。(237) 彼女はElizaとHarryを奴隷商人の魔手から逃がしたMrs. ShelbyやMrs. Birdとはあまりにも違う。Marieの欠点を知っていたOpheliaは、Marieの母性を目覚めさせようとするが、それが無駄に終わってしまい、Marieに母性が戻ることはない。さらに、奴隷たちはMarieに敬意を払うことなく、ただ自分たちを鞭打つ恐ろしい存在として捉えている。MarieはMrs. Shelbyたちとは違い、奴隷たちを鞭打つことを厭わない。なぜなら、彼女の生まれ育った環境では、奴隷を鞭打つことがごく自然であって、そうすることでしか奴隷を従えることはできないと教え込まれてきたからである。(149) 奴隷たちは、小さな女主人EvaのようにMarieが自分たちのことを愛してくれていないことを理解している。だから彼らは、Marieの体調不良を心配することはあり得ない。先述したとおり、Marieの体調不良の原因を家父長制が脅かされることへの懸念だとするならば、自分たちを鞭打ち続けるような制度を永遠に擁護し続けようとするMarieを奴隷たちが心配することはできない。そしてMarieもまた、南部の家父長制に身を投じすぎたため、奴隷を鞭打つことになにもためらいがない。Marieは“Don't you believe that the Lord made them of one blood with us?”(151) というOpheliaの問いに対し “No, indeed, not !! A pretty story, truly! They are a degraded race.”

(151)と強く否定する。彼女は奴隷のことを“immortal souls”(151)を持っている存在だという部分においては肯定しつつも、彼女自身と同じ人間だとは考えていない。彼女にとって奴隷は自分から女性の社会的立場である kitchen を奪った存在であると同時に、夫の財産でもある。だから彼女は夫の死後、幼少の頃から自分の世話をさせていた Mammy を除き、夫が紙幣に代わる手段として遺した自分への遺産とも言うべき奴隷を全員売却したのだ。Ophelia はその際、Eva や St. Clare が Tom を Shelby 家に戻れるように計らうよう遺言を残したことを Marie に伝えたのだが、Marie は Tom が自由な身分になることを望まなかった。なぜなら彼女は、奴隷が悪い奴隷所有者に出会うことなど 100 にひとつもあり得ないと考えていたからである。(281) この Marie の見解は、南部女性の奴隷制への価値観を垣間見せる。Stowe は黒人の持つ人間性そのものを Marie に否定させ、奴隷制を正当化する人物の根本的な見解を提示した。Eva の死によって母性を与えられた Ophelia は、この見解に賛同することはできず、Tom が Shelby 家に戻れるよう彼女を懸命に諭そうとする。しかし、これ以降、Marie は vinaigrette の薬だけでは治まらない勢いで取り乱していく。(281-282) これによって、Stowe は Marie をこの物語の中で最も尊敬に値しない人物であることをさらに強調し、Marie は母性に欠けるだけでなく、上品さにも欠ける女性であることを浮き彫りにする。

Marie と Ophelia はどちらも女性性に欠ける人物として描かれている。誰よりも敬虔な信仰心を持っていた Eva は、少女でありながらもまるでキリストのような人物として描かれており、彼女の死は、読者にキリストの贖罪をも髣髴とさせる。この聖者のような少女の死を奴隷制への贖罪と考えれば、彼女を心から信頼していた Ophelia は、彼女の死によって女性性を取り戻すことができたが、彼女を信じるができなかった Marie に救済は訪れない。Eva のことを心から愛することができなかった Marie はずっと女性性が欠落したままだ。Sentimental novels が流行していた 19 世紀アメリカで、Stowe はその手法を巧みに使い、美しく献身的な少女の儂い命を描いた。こうすることで、Eva が死に至る原因を強烈に読者の目に焼き付け、読者

の白人女性たちがMarieのように生きたくないと考えさせることに成功しているのである。

IV

奴隷制の問答が続く19世紀でも、最初から奴隷制そのものを受け入れることなく、自分たちだけでコミュニティを作って生きていた者たちがいた。それが、Halliday家のある、インディアナ州のクエーカー集落（Quaker settlement）だ。このクエーカー集落は第13章および第17章にしか登場しないが、読者に対しとても印象的だ。Halliday家はShelby家、Bird家、そしてSt. Clare家とも違う一家である。TompkinsやBrownが指摘しているのは、Stoweが描くHalliday家のkitchenは、Stoweにとっての“ideal kitchen”であり、この家庭の母親であるRachelはStoweにとって非常に重要な女性であるということだ。だからこそ、Stoweはこの家庭の様子を描くときに、“A quiet scene now rises before us.”(116)という一文から始め、読者に徹底的に印象づけようとする。StoweはHalliday家の家庭をとっても協調性のあるものとして描いている。すべての家事はRachelの指揮によってまかなわれ、家族は皆Rachelの指示によってまとまっている。この調和のとれた状態は人間だけではなく、家庭内にある物品にまで波及する。老朽化が激しく、使用すると不愉快な音を立てるだけのロッキングチェアでさえ、Rachelが使用すると心地よい音を立てるのだ。(116) SimeonはHalliday家の主であるが、彼は家事に関して口を出すことは一切ない。それどころか、家の片隅で、家父長制からは程遠い髭剃りに勤しんでいるだけだ。(122) Rachelたちクエーカー教徒（Quakers）は、奴隷制は神が定めたものではなく、人間が決定した法であると考え、奴隷制を受け入れることはない。よって、彼らは逃亡奴隷法（Fugitive Slave Law, 1850）を肯定しない。彼らは奴隷を所有することをせず、地下鉄道（Underground Railway）を使って逃亡奴隷たちを自由な身分にする手助けも行っていた。Mrs. ShelbyやMrs. Birdは逃亡奴隷法を道徳的に正しい法ではないとは考えていた。だが、彼らは女性であっ

て、男性の社会的立場とも言うべき marketplace で決められたことに異議を唱えるようなことはし辛かった。だから、上院議員の妻である Mrs. Bird は、Eliza の逃亡を手伝う障害となり得る、自分の信念とは相反するこの法律に対し、“Obeying God never brings on public evils.”(69) という言葉を用い、極度の苛立ちを見せた。夫の上院議員もまた、法を作る側にいるはずの立場であるにもかかわらず、逃亡奴隷法は良い法律だとは考えていないのだ。彼らの心の中には、道徳的に正しい法律ではないと考えていても、それを容認せざるを得ないという矛盾から生じる心の葛藤があった。だから、彼らが逃げてきた Eliza に出会ったとき、自分たちが頑なに守り続けている不条理な法を犯してでも、なんとかして Eliza たちを逃がしたいと願ったのだ。だが、Mrs. Bird の “Obeying God” は、クエーカー集落の中で行われていた。

ここでひとつの疑問が新たに生じる。なぜ Stowe は宗教的観点から奴隷制に異論を唱えるために、クエーカーというフィルターを通したのかということだ。そこで注目しなければならないのが、Stowe と同時期に活動し、Stowe 姉妹とも交流のあった、クエーカーの Grimke 姉妹の存在である。19世紀フェミニストの代表格とも言うべきこの姉妹は、奴隷制の残酷さを目の当たりにしても無力な自分たちにはなにもできないと、嘆くふりをして手をこまねいているだけの女性たちに奴隷制廃止を訴えるため、自らが壇上に立ち演説を行うなど、文字どおり表立って活躍していた。また、Grimke 姉妹は、特に南部の白人女性たちは平和な家庭環境作りに失敗しただけでなく、自分たち白人女性の社会的地位も落としたことを指摘し、このような自堕落な家庭環境を打破するためにも、女性の社会的地位を向上させる義務があるとした。この Grimke 姉妹とは違い、当時の女性らしく慎ましやかだった Stowe は、Grimke 姉妹のように自らが壇上に立ち演説することはしなかった。その代わり、Stowe は *Uncle Tom's Cabin* 執筆から10数年後、姉 Catherine との共著として *The American Woman's Home* (1869) を著し、家庭や kitchen を変えることから女性の意識改革を促していた。言うなれば Stowe 姉妹は、Grimke 姉妹とは対極にある姉妹なのである。つまり、クエーカー集落という舞台設定は、Stowe の念頭に Grimke 姉妹の存在

があることが窺えるのと同時に、Stoweがクエーカーというキーワードを提示しただけで、当時の読者層である女性たちがGrimke姉妹を連想することは容易かったのである。しかし、同じクエーカーであっても、Rachelは*The American Woman's Home*にも通じるような、Stoweにとっての理想的な家庭を作り、そして支えている女性として描かれている。さらに、Rachelは理想的な家庭を作り出しているだけではなく、奴隷制に関しても堂々と自分の価値観を貫き、奴隷に対してもひとりの人間として接し、彼らを悪しき奴隷商人の魔手から逃がすという行為に誇りさえ持っている。Stoweは、このように高潔なRachelという人物を作り出すことで、Grimke姉妹のように声高にmarketplaceに反旗を翻さなくても、自分たち女性の、日頃の行いだけで充分に社会を変えていくことができるということを示したのだ。それは、女性特有の慎ましやかさなどの女性性を消しかねない手段でmarketplaceへの進出を声高に訴えていたGrimke姉妹に対する、Stoweなりのアンチテーゼとなっていたのだ。

こうしてStoweは読者層である女性たちにBird夫婦の心の葛藤を見せた後、クエーカー集落では逃亡奴隷法に左右されることなく奴隷を匿い、彼らが安全な地へ逃げる手助けが当たり前のように行われている様子を描く。そうすることで、読者層が心の奥底に持っているはずの、母性や信仰心から生まれる愛や道德観を目覚めさせようとしたのだ。アメリカ合衆国にありながら、クエーカーたちは自分たちの集落の中で、自分たちの持つキリスト教的道德観と共に生きていた。彼らは黒人を奴隷として所有することも、信仰と政治を結びつけることもせず、専ら女性の力で自分たちの家庭の平和を保っていた。Mrs. ShelbyやMrs. BirdはStoweにとって理想の女性像であるが、彼女たちはElizaを堂々と逃がしたかったにもかかわらず、彼女たちが住んでいる社会における法によって、奴隷を逃がすという行為について、無意識のうちに罪悪感を抱いている。Stoweは、法と葛藤せねばならない彼女たちとは違い、己の信念のままに堂々と生きるRachelを力強く描いている。奴隷制を容認しない社会に身を置いているRachelだからこそ、まるで迷い子を守る母であるかのように、逃亡生活で疲弊し

きったElizaに“my daughter”(117)と語りかけ、母性から生まれる愛を最大限に発揮する。Rachelはこの物語の中で究極の女性像を持った“mother”(117)として描かれている。“Godlike mothers generate and rule this family state by their love.”(Brown 25)と評されるとおり、女神のような母が愛をもって家庭の秩序を守っているのである。彼女のすべての行いには、罪悪感も恥じらいもない。また、彼女はすべての物事をキリスト教におけるspirit of loveの精神で行う。しかし、Mrs. ShelbyやMrs. Birdは罪悪感を抱きながら己の正しいと思った道を切り開かなければならないのである。なぜなら彼女たちは逃亡奴隷法の下に身を置いているわけであり、クエーカーのRachelとは違い、奴隷を逃がすことは罪を犯すことなのである。Stoweはspirit of loveの象徴としてHalliday家のkitchenを設定し、その中心にいる母Rachelを、Stoweの抱く理想的な女性像を提示するためのiconにしている。

StoweはHalliday家のkitchenを“Everything went on so sociably, so quietly, so harmoniously, in the great kitchen”(122)という欠点のないものとして描き、アメリカの白人女性たちを正しい方へ導こうとした。Stoweはクエーカーではないが、彼らが奴隷を持たないばかりか、奴隷制への反対を掲げている信条を尊重していた。だからといって、彼女は読者たちにクエーカーに改宗しろと訴えたわけではない。彼女はただ、Rachelという女性を理想像として挙げ、spirit of loveの精神のままに女性性を貫くRachelの姿勢を尊重していたのである。つまり、Stoweは、クエーカーが逃亡奴隷の手助けをできるということは、クエーカー以外の宗派のキリスト教徒たちも堂々とそれを行うべきだと主張しているのだ。そして、そのためには、女性たちが理想の女性像を自分のものにすることで、社会や法をも変えていくことができると示しているのだ。

だが、興味深いことに、ここまでクエーカーの家庭やRachelの“great kitchen”の描写を描き、Rachelを女神のように描いたのにもかかわらず、Stoweはこの集落が今後どうなるかということを小説の最後になっても説明することはない。要は、Stoweはクエーカーそのものを気にかけているわけではなく、単に彼女は女神のような母であるRachel像を描きたかった

だけなのである。また、Stoweは、もしも女性がRachelのように揺るぎ無い道徳心と母性を持ち、毅然とした態度で生きれば、夫や息子のように身近な男性の道徳心を変えるだけでなく、やがては様々な男性のいるmarketplaceにまで影響を及ぼし、女性の力で世界をより良い方向に変えていくこともできると伝えたかったのだ。Stoweは、女神のような女性性を持つRachelがいる集落を描くことで、女性の正しい道徳心の影響を受けた男性のいる社会を読者に見せ、クエーカー以外の宗派の白人女性たちが、Rachelのように揺るぎ無い道徳心と母性を持ち、男性を導いていくことがどうしてできないのかと強く主張したかったのだ。このように、クエーカー集落の描写は、読者の女性性を目覚めさせるために最も効果的かつ印象的な機能を果たしている。

V

StoweはMrs. Shelby、Mrs. Bird、Marie、OpheliaそしてRachelの5名を対比させ、彼女たちの奴隷制への向き合い方を効果的に使用することで、理想の女性像を描き出した。しかし、奴隷制に注目し、奴隷を自由な身分にすることを訴えているかのように見えるこの作品を書いたStoweでも、本当の意味で奴隷を自由にしたいとは考えていなかった。言い換えれば、彼女は、奴隷制反対論者と言われたかったわけではないのだ。彼女が奴隷制をこの作品で取り上げた最大の理由は、奴隷制が女性にとって最も身近な社会問題だったからだ。女性たちは毎日否応なく奴隷制を目の当たりにして生きている。だからStoweは、読者層に感情移入してもらいやすくする仕掛けとして、奴隷制を扱った作品を書いたのだ。彼女は奴隷制という社会問題を通し、女性たちの価値観を変えさせるように促したかった。また、彼女は作中で奴隷制は邪悪なものだと明言することで女性たちの道徳心を呼び覚まし、男性と女性が共に新しい世界を作り出せることをも示唆した。女性たちが作り出した新しい世界を垣間見ることのできる最たる例が、Mrs. Shelbyの息子Georgeの存在である。この物語の終盤で、Georgeは立派

に成長を遂げる。つまり、Mrs. Shelbyのような善き母は、自分の持つ理想的な女性性によって息子や娘を立派に育て上げることができるということだ。また、それは息子や娘に限ったことではなく、奴隷たちをも立派に導いていくことができるということである。それを暗示しているかのように、Tomの死を目の当たりにし、ケンタッキーに戻ってきたGeorgeは、Shelby家の奴隷に熱弁を振るい、今まで働かされるだけだった奴隷たちも自由の身分となり、働いた分だけ賃金を与えると宣言したのだ。しかし、Shelby家の奴隷たちは、この若き主人の意見には従おうとしない。なぜなら彼らは、Shelby家の人々はとても優しい奴隷所有者だと理解しているために、この主人の下を離れて暮らすなんて考えることができないのだ。(379) これこそStoweにとっての、奴隷所有者と奴隷の理想的な絆である。だが、Stoweは奴隷を自由な身分にすることを肯定こそするが、かつての奴隷所有者と奴隷が対等な立場で付き合いしていくことが理想的であるとは提示していない。彼女は、もしも奴隷が自由になったとしても、白人の手助けなく生きていくことができないことを示唆しているのだ。なぜなら、大半の奴隷たちは十分に教育を施されておらず、社会の中で独り立ちして生きていく術を知らないのだ。だからこそStoweはGeorgeに、以下のようなことを言わせる。

“I expect to carry on the estate, and to teach you what, perhaps, it will take you some time to learn,— how to use the rights I give you as free men and women. I expect you to be good, and willing to learn; and I trust in God that I shall be faithful, and willing to teach.” (379-80)

Stoweは、奴隷たちが自由の権利をどのように行使すればいいか知らないのを知っている。そして、彼女はほんの一握りの奴隷たちだけが教育を施され、大概の奴隷たち、特に純血の黒人奴隷が教育を施されずに、独立しては生きていけないことを解っている。だから、StoweはGeorgeの言葉を使い、奴隷たちを自由な身分にした暁には奴隷たちに教育を施すほか、

彼らを労働者として雇うことを提案しているのだ。そうすることが、主人と奴隷の理想的な関係だからだ。そしてさらにStoweは、女性たちはこのように人種間に理想的な絆を作ることで、家庭環境も変えることができることを主張した。Stoweは、女性には男性を支えるという行為の中で、夫や息子への影響力があることを示し、彼女たちの力で男性たちをより道徳的にできると説いた。GeorgeがShelby家の奴隷に伝えた言葉は、Mrs. ShelbyやMrs. Bird、そしてOpheliaのような理想の女性像を持つ女性たちが男性たちを正しい道徳観と信仰心で導いた結果生み出された、理想的な奴隷制解決策のひとつなのである。このように、白人女性が自分たちの道徳心と母性を今まで以上に力強く発揮すれば、男性たちに多大なる影響を及ぼすことができるということをStoweは示している。

ただ、この物語の結末で、Stoweはリベリアに奴隷を移住させることが、白人女性の地位を守るための最善策のように描いているために、彼女がそれを望んでいるかのようにも垣間見えてしまう。だが彼女の根底には、奴隷を排除するという感情が成立する以前に、家事や母性を手放そうとしている女性たちに、Marieのように怠惰な女性にならないよう訴えたいという感情があるのである。たしかに、白人とは相容れない人種をリベリアに移住させるという方法は、当時存在した奴隷制解決策の中のひとつではある。しかし、この解決法については、Elizaと共にカナダへの逃亡を遂げた混血奴隷のGeorge Harrisが手紙で訴えたのみであり、この作品に登場するすべての白人女性の登場人物は口にしていないのだ。つまり、Stoweにとって、奴隷をリベリアに移住させるという手段は、理想の女性像を持つ女性が抱くべき見解からかけ離れているということになる。だから、Mrs. Shelbyをはじめとする理想的な女性像を持つ白人女性たちにとっての奴隷制への最善策は、逃亡奴隷のGeorgeではなく、Mrs. Shelbyの息子Georgeの振る舞いに基づくものとなるわけである。

StoweはMrs. ShelbyやMrs. Birdを登場させ、女性たちは男性の社会的立場であるmarketplaceにおける道徳的な状況を理解できることを示した。そしてさらに、Grimke姉妹のように自分たちが直接表に立たなくても、女性

は、夫や息子の道徳観を正しい方向に導いていくことで、marketplaceに自分たち女性の立場を新しく作り出せるような力を持っていることを示しているのである。そのためにも、まずは自分たちの社会的立場の基盤とも言うべき家庭すなわちkitchenを、母性から生まれる愛をもって導いていかねばならないとしている。

Mrs. ShelbyやMrs. Birdは家庭を平和に守るほどの能力を持っていた。しかし、Stoweは白人女性が家事を怠り、怠惰な生活をしていたのならば、Marieのようにになると警鐘を鳴らしている。Marieはすべての家事を放棄し、奴隷にその役割を与えた結果、この物語の中で最も怠惰な女性となってしまったように描かれている。彼女の振る舞いは女性性の中で最も劣悪な部分のうちのひとつである。逆に、Evaは最も天使のような少女であり、その名が示すように、キリスト教の愛の部分と人道的な部分を併せ持っている。しかし、彼女は病気によって、少女のままその生涯を閉じることになる。Marieはいつも自分が病気であると考えていたが、それこそが娘を死に至らしめた原因である。Stoweは、悪い母親は自分の子供を不幸せにすることを暗示した。つまり、母親の失態が自分の子供を死に至らしめるということだ。Opheliaは独身であるが、母性の代わりに確固たる宗教観と道徳心を持った女性である。Stowe持つ信仰心を投影された存在として描かれた彼女は、福音主義そのもののようなEvaの人間性に一目置いている。だが、彼女はEvaのように、自分の持っている愛情を大っぴらにしようとはしない。言い換えれば、StoweはEvaの人間性をそこまで重視していないということだ。

Rachelはこの小説の中で最も女性らしい愛に満ち溢れた女性である。そんな彼女の集落は、理想の女性像を作り出している。Mrs. ShelbyやMrs. Birdは19世紀アメリカにおいて理想的な女性像であるが、彼女たちはRachelのようにkitchenに立って料理まではしない。なぜなら彼女たちには奴隷がいるからだ。一見、StoweはHalliday家を理想として掲げ、Rachelのように白人女性だけの力で料理をはじめとする家事を行い、家庭をしっかりと守ることを促しているようにも見えるが、その実は違う。なぜなら、

理想の奴隷所有者の妻であるMrs. Shelbyは、自分がkitchenに入らなくても、奴隷たちを使ってなんでもできる。つまり、Mrs. Shelbyたちは奴隷を正しく指揮することで、自分たちの家庭を正しく導くことができるのだ。ここがRachelとMrs. Shelbyたちの決定的な違いである。Rachelは奴隷を所有するという権利を当初から放棄しており、大きな母性こそ持っているが、自由を求めて逃げてくる奴隷をアメリカから逃がすことしかできない。だが、Mrs. Shelbyたちは違う。今でこそ逃亡奴隷法の下で暮らしているが、自分たちが家庭の中で正しい道徳性と信仰心を貫いて男性を支え、子供たちを育てていけば、Mrs. Shelbyの息子Georgeのように、次の世代を担う子供たちが成人したときに、女性がずっと望んでいた理想的な社会を築いていける可能性があることを示唆しているのだ。

Stoweは*Uncle Tom's Cabin*で奴隷制を描き、19世紀の白人女性の道徳的観点に劇的な影響を与えた。白人女性にとって最も直接的な社会問題である奴隷制がこの物語の中で重点的に扱われ、男性のようにmarketplaceには向いていなかった彼女たちの視点が、この作品を境に、彼女たち特有の道徳的な考え方や宗教的な観点をもって、社会のあらゆる問題に関して向き始めるようになる。StoweはGrimke姉妹のように、自分自身が壇上で女性の社会的進出を声高に訴えていたわけではない。むしろ彼女は姉との共著の中で女性がいかにしてkitchenを守るかということを主張している。それは、家庭それもkitchenという場所を基盤にして、女性の意識改革を促すことでもあった。このように、Grimke姉妹とは対をなす方法で女性が社会に目を向ける方法を示したStoweは、南北戦争のきっかけの一端を担ったとして、1862年にホワイトハウスを訪れ、Abraham Lincoln(1809-65)と握手を交わし“Is this the little woman who made this great war?”と声をかけられたというのはあまりにも有名な話であるが、この一件が事実であるか否かは問題ではない。(Reynolds x) 時の大統領に讃えられるというひとつの伝説まで残し、Stoweと*Uncle Tom's Cabin*は奴隷制廃止論者にとってのiconのひとつとなり、彼女は後世まで語り継がれる存在の女性となったことが重要なのだ。なぜなら、この伝説からも解るように、Stoweこそが、女性の

守るべき場所であるkitchenを拠点に、己の道徳心と母性から生まれ出る愛を貫き通し、大勢の女性だけではなく男性にも影響を与え、社会を変えていった女性そのものなのである。こうして、StoweとStoweの描き出す理想の女性像の影響を受け、今までkitchenの中だけを守っているようにしか見えなかった女性たちは、自分たちの持つ確固たる道徳心と愛の力で巧みに男性を操り、男性のみが変えられる社会であったはずのmarketplaceに大きく進出を始め、いつの間にか多大なる影響力を持つようになっていったのである。

Works Cited

- Baldwin, James. "Everybody's Protest Novel" *Notes of a Native Son*. New York: Dial, 1949. Print.
- Beecher, Catharine E., and Harriet Beecher Stowe. *The American Woman's Home*. 1869. Ed. Nicole Tonkovich. New Jersey: Rutgers UP, 2002. Print.
- Brown, Gillian. *Domestic Individualism: Imaging Self in Nineteenth-Century America*. Berkeley: U of California P, 1990. Print.
- Hedrick, Joan D., *Harriet Beecher Stowe A Life*. New York: Oxford UP, 1994. Print.
- Kimball, Gayle. *The Religious Ideas of Harriet Beecher Stowe: Her Gospel of Womanhood*. New York: The Edwin Mellen, 1982. Print.
- Lang, Amy S., *Prophetic Woman: Anne Hutchinson and the Problem of Dissent in the Literature of New England*. Berkeley: U of California P, 1987. Print.
- Garrison, William L., "Review of *Uncle Tom's Cabin*" *The Liberator*. Boston: n. pag., March 26, 1852. Print.
- "Review of *Uncle Tom's Cabin*" *The Morning Post*. Boston: n. pag., 1852. Print.
- Reynolds, David S., *Mightier Than The Sword*. New York: Norton, 2011. Print.
- Riss, Arthur. "Racial Essentialism and Family Values in *Uncle Tom's Cabin*," *American Quarterly* 46 : 513-44., 1994. Print.
- Thompson, John R., "Review of *Uncle Tom's Cabin*" *Southern Literary Messenger*. Richmond: n. pag., 1853. Print.
- Stoneley, Peter. "Sentimental Emasculations: *Uncle Tom's Cabin* and *Black Beauty*." *Nineteenth-Century Literature*. 54. 1: 53-72., 1999. Print.

- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin*. 1852. Ed. Elizabeth Ammons. New York: Norton, 1994. Print.
- _____. *A Key to Uncle Tom's Cabin*. 1853. New York: Arno, 1968. Print.
- Sundquist, Eric J. *To Wake the Nations: Race in the Making of American Literature*. Cambridge: Harvard UP, 1993. Print.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985. Print.
- Yellin, Jean F. "Doing It Herself: *Uncle Tom's Cabin* and Woman's Role in the Slavery Crisis," *New Essays on Uncle Tom's Cabin*, ed. Eric J. Sundquist. New York: Cambridge UP : 85-105., 1986. Print.